

武蔵小山 たけのこ物語

はじまり

江戸時代 1773年

江戸は大きな台風に見舞われ、立会川や目黒川では洪水がおき、刈り入れ前の稲が全滅するなどして農民は苦しい生活を強いられることになります。



なんとかせよば!!

そこで立ち上がったのが
山路治郎兵衛勝孝
(やまじろべえかつたか)

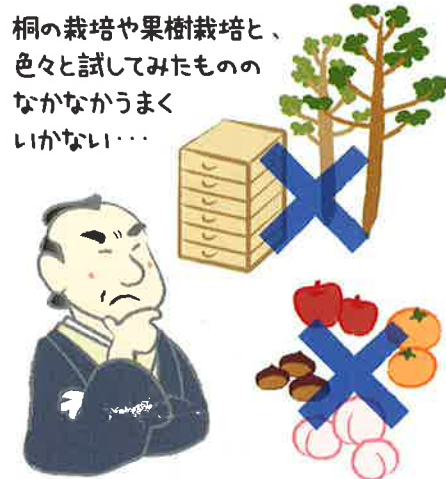


たけのこ物語はこの人がいたことではじまりました。

物語のKEY PERSON 山路治郎兵衛勝孝とは?

手広く廻船問屋を営み、築地・鉄砲洲に店を構えていた治郎兵衛勝孝は、1773年に隠居して品川の後地に別宅を持つことになりました。
浄土真宗西本願寺の門徒でもあった治郎兵衛勝孝だからこそ、農民の暮らしを良くしたいと強く思い、なんとか彼らの暮らしを支える新しい産業を作り出そうとしたのです。

試行錯誤の末たどりついた
「たけのこ栽培」



1789年

そんな治郎兵衛勝孝が最後に目をつけたのが、中国原産の**孟宗筍**でした。(もうとうたけのこ)



山路勝孝が見つけた 孟宗筍とは?

中国原産の成長の早いたけのこです。1736年に薩摩藩が、中国と交易のあった琉球から取り寄せました。その後、藩の特産品として50年の長きにわたり門外不出となっていました。
普通では手に入らない孟宗筍ですが、治郎兵衛勝孝が廻船問屋時代に磨いた交渉力のおかげで、品川の薩摩藩島津の下屋敷から鉢入れをわけてもらうことができました。

たけのこ最盛期!!

やっと手に入れた孟宗筍を、治郎兵衛勝孝が自宅の庭に植えたところ、どんどん成長し、いつしか庭に竹林ができました。すぐにたけのこの販売を始めるものの、最初はなかなか売れませんでした。



目黒不動尊の門前茶屋で「筍めし」を売り出したり

工夫に工夫を重ねた結果、噂が噂を呼び、たけのこは次第に人々に受け入れられ、食されるようになります。

明治時代・大正時代

明治の頃になると、「武蔵小山のたけのこ」はブランド野菜となっていくいきます。

KEY POINT 3 ブランド野菜の証? 「たけのこ勘定」とは?

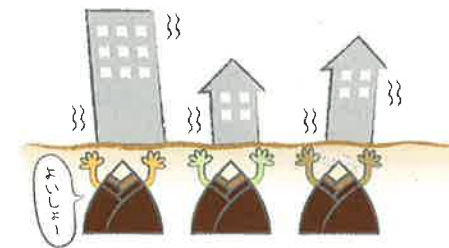
この頃、たけのこ農家の人々は何かの支払いの際に手持ちがなかった場合、「たけのこまで待ってくれ」といえば、ツツにしてもらえそうです。そのくらい、たけのこは信用のある農作物だったのです。

武蔵小山の発展と
竹林の減少



大正12年頃

関東大震災と目蒲線開通の影響で、震災の被害を免れた人々が被害の少なかった目蒲線沿線の武蔵小山に移住してきました。



KEY POINT 4 竹やぶは地震に強い?

竹やぶは地震に強い?

地下茎植物である竹は、地盤を強くすると言われています。地面の深いところで絡まり合った竹の根っこが、地震の揺れから建物を守ってくれたでしょう。

人が増えることでまちは賑わいましたが、住宅建設のため竹林を伐採せざるをえなくなりました。そして、徐々に竹林が減少していくことになりました。

たけのこの里はもうないけど、今日の武蔵小山の発展にはたけのこの存在が大きく関わっていることを忘れてないで。



昭和～現在

人口が急激に増えたことで、住民の需要を満たそうと商店街が作られます。昭和31年にはアーケードが完成し、第1のアーケード街となります。そしてご存知の通り、現在は日本で最も長いアーケード商店街のある街として多くの人に知られています。



現在の武蔵小山の商店街